

中の本尊とは成したりといへり。

○阿茶子屋敷

村井長明自記に云ふ。天正十一年柳瀬敗軍之時、秀吉公御人數越前府中に到着。利家卿此城は予が墓所なり、立退度者は早々退候へと御下知にて、城中より嚴敷鐵炮爲御打候へば、堀久太郎先手にて府中の城近く押寄せ、暫く矢留に被成候へ、申談度事有之よし、矢文を射越し、城門近く立寄り、曉に參られたる由、久太郎殿被申演候へば、利家卿、柴田へ我等娘を證人に出し置きたり。難捨旨被仰故、一日一夜秀吉公御在陣有之處、其内に北庄への御證人の介添に付被置候あちやこ才覺を以て、矢倉より忍び出で、頓て町屋へ出で、人を頼み、其段府中へ注進申しけるよし。此あちやこと申すは、後に少將と申し、金澤彦三町二番丁に屋敷被下在之。庭に千本の櫻多く植置き、花盛の頃には利家卿御成有之儀私も覺罷在る。とあり。又亞相公夜話録にも、柳瀬敗軍にて利家様府中城へ御入候へば、太閤様府中の城へ鐵炮打懸け、内よりも打出す。扱堀左衛門殿を曉に御越候て、それより無事に成り、利家様太閤様へ御附被

成。但し、北庄の人質の左右を利家様御待候儀、後々までも何れ茂感じ被申。其時御證人加賀様にて、御供にはあちやこ、後には少將殿に成被申。と見え、菅家見聞集にも、此の文のまゝを載せたり。三壺記に、徳庵といふ者、利家卿の人質を盗み出し、つれて行きけれども、不忠の者として御恩賞もなかりしかば、立歸り籠城す。とあり。右人質は則ち加賀様なるべし。さて加賀様といふは、利家卿第三の息女にて、後に秀吉公の裏方と成り給へり。前田家略譜に、利家卿御三女阿磨姫。天正十年春。定婚于佐久間十藏。同十一年羽柴・柴田鉾楯。以姫爲北庄之證人。于時佐久間十藏死于城中。依之同十三年八月仕官于豊太閤。時人稱加賀殿。とあり。青地禮幹の本藩略譜に、諱磨阿。一作阿茶。爲豐主宮人。稱加賀殿及小將是也。とあり。按ずるに、壬子集録に載せたるかうしゆ院覺書に、かゞさまはおまあさまと申すと載せられたれば、阿磨とあるも磨阿の誤り、また一作阿茶とあるは、北庄へ介添に付けられし阿茶子の名と混じたるもの也。また少將といふも、阿茶子の事なるべし。

○梶川彌左衛門善邸

關屋政春古兵談に、梶川彌左衛門は、大坂陣の時黒門にての鐘、葛卷平四郎・葛卷隼人・古屋所左衛門等五人の内也。居屋敷は彦三一番丁也とあり。

○梶川彌左衛門傳

梶川氏の子孫早く絶えたりし故に、其の履歴詳かならず。元和・寛永の士帳に、御使番七百石梶川彌左衛門。とあり。三州志には、二千石寛永十六年大聖寺從臣となる。此の子數馬千石と、大聖寺承應二年の土籍に見え、延寶二年以來梶川氏見えす。大聖寺にても斷絶の子細知れず。と云ふ。彌左衛門は、微妙公放鷹の時鳥銃にて鷲を打落し給ふを、只一人行きて押へたる事、および公上洛の時、日野岡の群集中乞食を刀のむねにて打倒したる事、加邦録に見ゆ。又國祖及び世子へ、太閤より宇治川河せきの事を命ぜられし時、小姓梶川長助と云ふ人、村井長明筆記に見ゆ。彌左衛門の若名なるべしといへり。平次按ずるに、信長記に、天正元年七月室町殿謀反の時、梶川彌三郎と云ふ人、宇治川の先陣せし事見え、同四年天王寺附城攻の時、佐久間が与力梶川彌三郎とあり。是若しくは彌左衛門の父ならんか。

彌左衛門は、關屋政春の古兵談に、利常卿の御仕立に梶川彌左衛門といふ者あり。若き時より御用に可立者と傍輩共いひ、利常卿も左様に被思召けるか、御量負にて被召仕とあり。されば利常卿の時より奉仕せし人なる事いぢるし。然れば利家卿の時なる梶川長助は、彼の信長記に見えたる梶川彌三郎と同人にて、彌左衛門の父なるべし。又彌左衛門が鷲を押へたりとの傳話は、微妙公夜話録に、小立野へ放鷹に出で給ふ處、淺野川の河原に鷲の居たるを鐵炮にて爲打給ふに、河原を飛ばたきし居たり。梶川彌左衛門二三間もあるがけを飛下り、鷲を捕へて御前へ持參するに、させる御意もなかりけり。夫より十年許後、俱利伽羅峠の猿が馬場にて、先年梶川彌左衛門が飛下りたるがけは、是程もあるべし。能く飛びたりと大橋又兵衛へ御意あり。と見え、又京都日野岡にての事は、關屋政春古兵談に、將軍家御上洛の時、利常卿は大津より京都へ御越也。此時日野岡にて甚だ群集し、往來成り難く、御供中聲を懸くれども、耳にも不聞入。時に梶川彌左衛門刀を抜き、乞食の様成る者を刀のむねにて討倒しければ、上下喧嘩と心得崩れ